

## 山口瑞鳳先生を偲ぶ

吉水 千鶴子

山口瑞鳳先生が本年2023年4月15日に肺炎のためにご逝去された。97歳というご長命であったとはいえ、大切な学問の師を失ったという思いは強い。歴史、言語のみならず、曆や敦煌文献、仏教にいたるまでチベットに関することはなんでも論じられ、日本のチベット学の発展に大きく寄与された。

山口先生は1926年2月21日石川県にお生まれになった。幼少より親戚筋のお寺に預けられ、「山口瑞鳳」とはそこで授かったお名前前で、「本名はもっと可愛らしいのだ」と伺ったことがある。金沢工業専門学校機械科を卒業後（とても機械好きでコンピューターなどにも真っ先に飛びついておられた）、第一高等学校文科をへて東京大学へ進み、1953年印度哲学梵文学科を卒業された。辻直一郎、中村元のもとで、サンスクリット語からの翻訳チベット語の文法的特徴を研究された。大学院で学んだ後、1958年32歳でフランス国立科学研究センター（CNRS）研究員としてパリへ渡る。R. A. スタン、M. ラルーに師事し、パリ大学高等学術研究院（EPHE）で古代・中世チベット語、敦煌文献の研究に携わられた。ロックフェラー財団の支援も受けてフランスで過ごされた歳月は6年になる。奥様の瑩子さまを同伴されての留学で、息子さんもあちらでお生まれになった。当時は日本からの留学生もめずらしく、ご苦勞も多かったと思われる。「道を歩くと、よく子供たちからシノワ（chinois）と指差された」とおっしゃっていた。帰国されたときには、逆に日本の「魚の匂いが耐えられなかった」そうだ。しかし、スタン先生のもとでの研究は実り多きもので、山口先生の学問の幅の広さ、批判精神はこの間に培われたものであろう

（もっとも毒舌と天邪鬼は生来であったかもしれない）。

1964年9月に帰国、東洋文庫研究員となられた。以来東洋文庫では最晩年までご貢献いただいた。1970年東京大学文学部文化交流研究施設の助教授、1979年に教授になられた。文化交流研究施設は研究室や講座の枠を超えて研究を行う施設として1966年に作られた（現在の次世代人文学開発センターの前身）。大学院では印度哲学印度文学研究室の所属で、原実先生、高崎直道先生、前田専学先生などと共に学生の指導にあたられた。文化交流施設で山口先生の助手を最初に勤められたのは西岡祖秀さん、次に田中公明さんであった。『スタイン蒐集チベット語文献解題目録』作成のため、西岡さん、田中さん、木村隆徳さん、沖本克巳さんなどが東洋文庫に集い、敦煌文献研究の東京における拠点となっていた。

山口先生は、1979年『吐蕃王国成立史研



コレージュ・ド・フランス中庭のシャンポリオン像前で中村元先生と（御子息、山口卓さまご提供）

究の考証的研究』で東京大学において博士の学位を取得され、その改訂版を1983年『吐蕃王国成立史研究』として岩波書店より出版、翌年に日本学士院賞を受賞された。これが古代史研究の集大成であるとすれば、チベット語研究の結実として『チベット語文法』(春秋社1998年)を挙げられよう。私はこの書に索引を作らせていただいた。教科書向けにコンパクトな『概説』チベット語文法(春秋社2002年)も出版された。山口文法は難しい。初歩の学生にはほとんどわからないと言われる。だが、私が先生の授業で習った頃の手書きノートはわかりやすかった。まず例文が易しかった。そのいくつかは「自分で作った」とのちに明かされた。本にするときにはさすがにそれは省き、原典から文章を集めたので難しくなったのだろう。また、説明も独自のものがある。だが、「見える」「聞こえる」などの「第二類自動詞」の分類は日本語に近く、私にはよく理解できた。

私は山口門下の末席を汚している者だが、大学院生として先生に教えをいただいたのは1982年から先生が東京大学を退職し名古屋大学に移られた1986年1月までであった。先生は3つ授業をお持ちであった。学部のチベット語文法と講読、大学院の授業である。当時は辞書といえばイエシュケカチャンドラ・ダスの蔵英辞典しかない。載っていない単語も多々あるので、先生が辞書がわりだった。学部の講読では先生ご自身がお読みになりたいもの—ダライラマの伝記—を3世から5世まで読み続けた。翻訳を学生に黒板に書かせて先生が添削する。「全然違いますねえ」とあの独特の声とイントネーションで楽しそうに訂正されていた。この授業からはやがて東大の学生は消え、外部から宮脇淳子さん、石濱裕美子さんが参加され、女ばかりになった。私一人だった年もある。ここで史書とい

うか伝記物というか、仏教書ではないチベット語の文体の訓練を受けたことが後々私には大いに役に立った(筑波大学で東洋史の学生を指導することができた。彼らが現在日本のチベット学を担っていることは私の誇りである)。大学院ではチャンキヤの『宗義書』を講読し、松本史朗さんや福田洋一さんなどが喧々諤々議論していた。山口先生は仏教のご専門ではないからと言って、彼らを質問攻めにした。そしてチャンキヤは皆にとって特別な人となった。袴谷憲昭さんなどはチャンキヤが夢枕に立ったそうである。

名古屋大学の立川武蔵先生の研究室に3年間奉職された後、1989年東京大学名誉教授となられ、以前より関わっておられた成田山仏教研究所に客員研究員として通われるようになった。1989年は成田山で国際チベット学会が開催された年である。先生はこの招致のために尽力され、私は成田山仏教研究所助手としてお手伝いをさせていただいた。翌年私はウィーン大学へ留学したが、5年後帰国してまた成田山仏教研究所のお世話になり、毎週先生にお目にかかることになった。成田山の境内を歩きながら、いろいろなお話を伺った。ドイツのシュー博士との間で論争と



1989年8月国際チベット学会(成田ビューホテル)、右よりH.ユーバッハ、R.エメリック、山口瑞鳳、鶴見照碩成田山貫主、吉水千鶴子(私以外はみな鬼籍に入られました。)

なったチベット暦の説明を何十回も聞かされた。何度聞いてもよくわからなかった。この頃は仏教研究に情熱を燃やされ、とくにお気に入りであった『スッタニパータ』『中論』そしてシャーントラクシタの『中観莊嚴論』の話をよくなされた。私が成田を離れ筑波大学勤務になってから先生が90歳を過ぎられて施設にお移りになるまでは、年に一度くらいご自宅を訪ねるのが慣しになった。最後にお目にかかったのは、90歳のお祝いを兼ねてカワチェンさんが主催された「山口瑞鳳博士が語るチベットと私」という座談会であった。西岡さん、松本さん、池田練太郎さん、斎藤明さんなどかつての教え子がお見えであった（教え子の古株では、このほかにも長野泰彦さん、貞兼綾子さんなどはまだご活躍である）。終了後チベット料理屋にご一緒し、先生の食欲が相変わらずだったので安心した。

ご自身の仏教解釈をまとめられた『「評説」インド仏教哲学史』（岩波書店2010年）が最後のご著書である。先生の仏教理解には誤解も多々あり、あまり顧みられてはいない。だが、私たちの認識が時間の流れを捨象した表象と言語によって成り立つことを深く考察されたその視点は、とくに中観思想の理解にはきわめて有用で傾聴に値する。一方、広くチ

ベットに関心を持つ人たちに向けて執筆された『チベット』（上下、東京大学出版会1987-88年、毎日出版文化賞受賞）は、読み継がれる古典となっていくであろう。山口先生は実に多岐に渡るテーマで、和文論文100点余、20点ほどの欧文（英語またはフランス語）論文を残された。英語論文の多くは、やはりお弟子さんであったロルフ・ギーブルさんがお手伝いしていた。ご自身がお若かった頃、東洋文庫の書庫でふと手に取った論文に感銘を受けた経験をお話され、「俺の論文もいつか誰かが見つけて、こんな論文があったのか、と感心してくれたら、そのときは草葉の陰で笑うんだ」と仰っていたことを思い出す。今頃笑っておられるだろうか。まだ早いか。



2016年5月22日、カワチェン主催座談会にてケルサン・タウワ氏と。